

検見川送信所の再生

Keywords

検見川送信所 産業遺産 住民が作る図書館



AK12004 阿部 拓也

日常 状況的学習論 コンバージョン

1. はじめに

かつて千葉県千葉市花見川区検見川にある検見川送信所は生活の一部であり、町の風景に溶け込んでいた。農民は定時のサイレンを時計代わりに使用し、漁民はアンテナの方角から船の位置を判断していた。しかし現在の住民の多くは検見川送信所の価値を認識しておらず、廃墟としての認識しか持っていない。

検見川送信所を知る会はこの現状を改善するために検見川送信所を千葉市地域文化財に登録しようと活動している。その結果、千葉市は検見川送信所を竣工当時の「白亜の殿堂」の姿に復元し、保存する方針であると発表した。

2. 研究背景

2.1. 検見川送信所の歴史

検見川送信所は1926年に開局され、1930年にはロンドン海軍軍縮会議で、日本初の国際放送を行った。この他にも、戦前戦後を通して、通信技術の向上と、通信技術者の養成に貢献した。その後、検見川送信所は業務の全てを名崎送信所に移し、1979年に閉局した。

現在は鉄塔や倉庫、エンジン室は撤去され、中核をなしていた無線棟のみが現存している。

2.2. 吉田鉄郎

設計者の吉田鉄郎は、通信省で多数の建築物を手掛けた人物である。代表作として「東京中央郵便局（1931年）」、「大阪中央郵便局（1939年）」等が挙げられる。通信省を辞したのち、日本大学で教鞭をとった。

柱梁以外は開口部で構成するモダニズムの先駆者であり、建築史上でも重要な人物である。

3. 研究目的

検見川送信所を竣工当時の姿に復元するのではなく、現代的な価値を付加した建造物として再生させる。保存財としての検見川送信所を日常的に使用する活用材として作り替えることで、徐々に住民に認知させ、町のシンボルとしての姿を取り戻させる。

4. 敷地

千葉県千葉市花見川区検見川町5丁目2069番地の検見川送信所跡地を敷地とする。JR新検見川駅より南へ0.7kmに位置し、周囲1~2kmの範囲に京成電鉄検見川

駅、京成稲毛駅、JR検見川浜駅の3駅が取り巻いていることから、交通は利便である。

敷地の南にある東関東自動車道と、北東にある花見川は、花見川区、稲毛区、美浜区を分断している。

用途地域：第一種低層住居専用地域

敷地面積：22,153m²

建蔽率：50%

容積率：100%

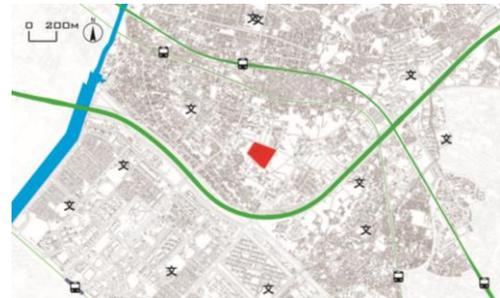


図2 敷地全体図

5. フィールドワーク

5.1. 調査内容

- 現在の検見川送信所及び対象敷地の実測、スケッチを行い、敷地図、立面図を作成する。
- 保存団体へのインタビュー調査を行う。

5.2. 作成図面

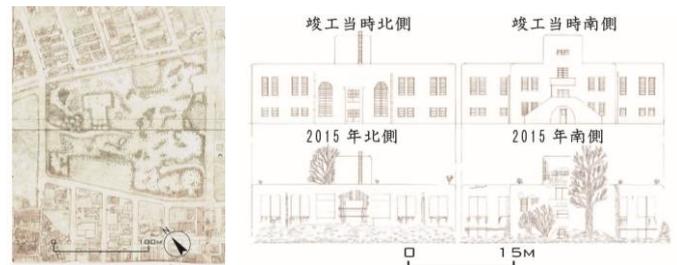


図3 敷地周辺図、立面図

5.3. 図面分析

(a) 敷地周辺図の分析

本来エントランスである南側立面は立ち入り禁止されており、住民に認知されていない可能性が高い。そのため住民からは最も活用頻度が高い北側立面が認知されている。

(b) 立面図の分析

竣工当時立面からは、表現主義的な様式が採用されており、アーチ窓や出隅を丸い曲面としている点や、左右対称である点、開口部が一定の間隔で配置されている点の特徴として挙げられる。

2015年立面図からは、南側立面のコンクリートの一部が剥がれ落ち、鉄筋がむき出しになっている。これは目の前の樹木が風に揺られぶつかることで、損傷したものである。コンクリート自体の損傷は南側立面以外はほとんど見受けられなかった。

その他、開口部が侵入者防止のため鉄板で覆われている点や、その鉄板から錆が垂れており、外壁に汚れが生じている点などが特徴として挙げられる。

5.4.インタビュー結果

取り壊しを望んだ人々からは治安への影響が最も懸念されている。他には、外部意匠に現れている表現主義様式は内部空間にも色濃く現れており、外部に対して内部の保存状態は良好であるということが分かった。しかし検見川送信所の内部調査は2012年に千葉市が美浜区の設計事務所に依頼し、行った調査から行われておらず、2015年現在の内部状況は不明である。

5.5.考察

住民が一番懸念していることは、治安上の問題である。検見川送信所が積極活用されるためには、治安上の問題を引き起こしている廃墟性を解決する必要がある。

6.プログラム

6.1.プログラム提案

廃墟性を取り除き、住民自らが作り、日常的に活用される施設を計画する。敷地周辺に多い小中学生を中心としながらも、多世代に活用されるため、学校ではなく、学校外学習空間として機能する図書館を計画する。

6.2.分析

敷地周辺は小学校数、中学校数ともに千葉市平均数の約2倍存在する。

以上から、小中学生数は一般的な敷地に対して非常に多い。よって小中学生を中心に考え、小中学生が日常的に行っている学習という点に着目する。

6.3.学校批判

学校が登場してから、多数の哲学者や教育学者による学校批判が行われてきた。その一人であるI.イリッチによる学校の定義とは「学校とは特定の年齢層を対象として、履修を義務付けられたカリキュラムへのフルタイムの出席を要求する教師に関連のある過程」であった。この定義は近代の学校の問題点を的確にとらえており、年齢層を区分すること、学ぶ内容の規定（試験のための勉強）、一定時間の拘束、専門化によるブラックボックス化などが挙げられる

6.4.状況的学習論

学校に独占されている学習体制から脱却するための一

つの可能性として、図書を利用した、状況的学習論を活用する。

状況的学習論とはレイヴとウェンガーにより提唱された理論である。この理論では、学習とは学校で行われるものではなく、学習とは社会共同体に参加する行為そのものであるとした。学習とは、あらゆる状況に参加し、議論し、知識を更新し、再構築することで熟成される。そして学習を行った結果、参加者が獲得するものは「熟練のアイデンティティ」である、と指摘している。

状況的学習論をプログラムとして組み込むには、計画敷地内に異なった場所性を与え、異なる人々が日常的に活用する必要がある。そのための提案の一つが住民自身の本を寄付し、皆でシェアする住民の本棚としての機能である。この本棚にはあらゆる図書が入り、漫画や料理本、DVD等内容を問わない。公共施設としての図書館ではなく、自分の家の延長線上として活用させる。個人特有の記憶を持つ様々な図書はあらゆる状況を生み出す手助けをする。

6.5.プログラム面積

図書館：3750㎡

- ・事務部門：345㎡
- ・開架閲覧：2120㎡
- ・保存書架：163㎡
- ・機械部門：235㎡
- ・交流部門：635㎡
- ・集会部門：245㎡

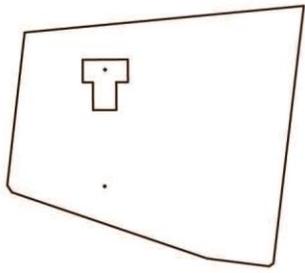
7.設計手法

7.1.廃墟性の喪失

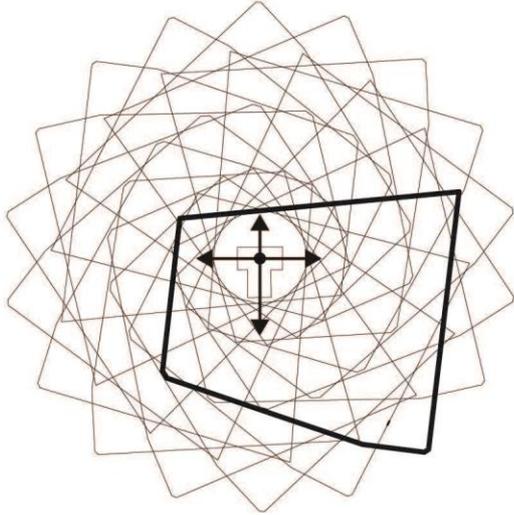
5.5.の考察から、外壁が廃墟性を生み出していることが分かった。ここから、検見川送信所の外壁を保存する壁と取り壊す壁の2種類に分け、取り壊す壁の周りに新たな外壁（ガラス）を配置する。外壁をなくし、内部空間をオープンにすることで、廃墟性をなくす。

参考文献

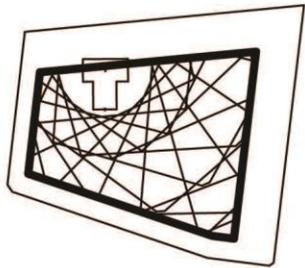
- 1) 検見川送信所を知る会公式ホームページ
- 2) 旧検見川無線送信所文化財調査業務委託 [1] 一千葉市
- 3) 吉田鉄郎作品集刊行会『吉田鉄郎作品集』東海大学出版会、1968年
- 4) J.レイヴ『状況に埋め込まれた学習』産業図書、1993年
- 5) I.イリッチ『脱学校の社会』東京創元社、1977年



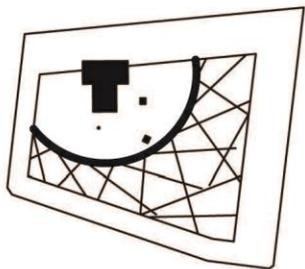
敷地に対して、偏心した場所にある検見川送信所



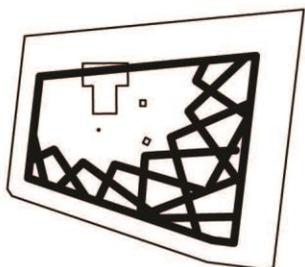
検見川送信所を敷地の中心にするため、既存の平面図の動線の結節点を重心に設定。敷地の外形線を用い、円の軌跡を描き出す。



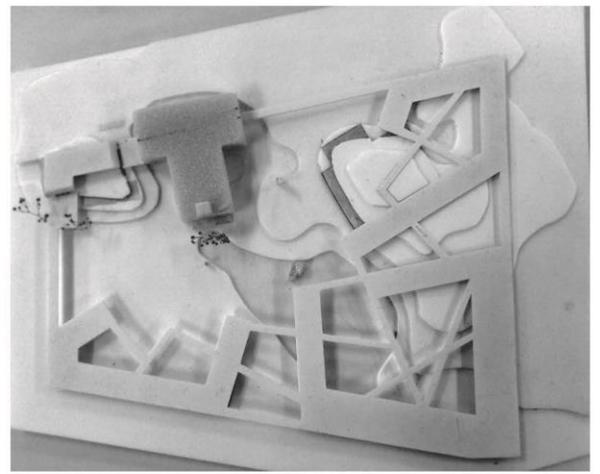
検見川送信所の塔の部分が周囲の道路から見えるように設定。



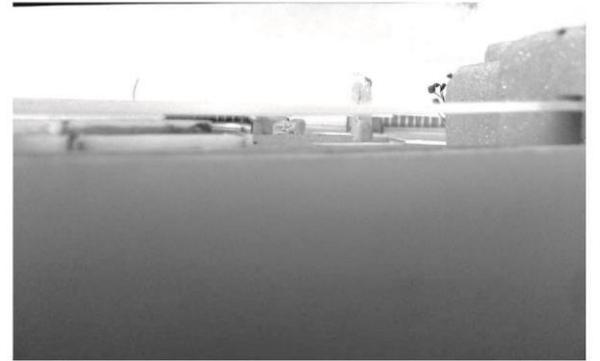
当時のまま残っている検見川送信所、給水塔、倉庫、記念碑を保存し、中心広場を設定。



地形等を意識し、図書館の機能を分散的に配置



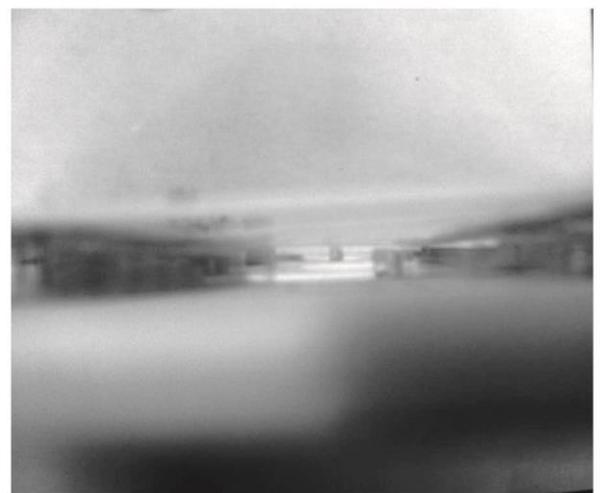
上から見る



北側から中心広場を見る



西側から南側エントランスを見る

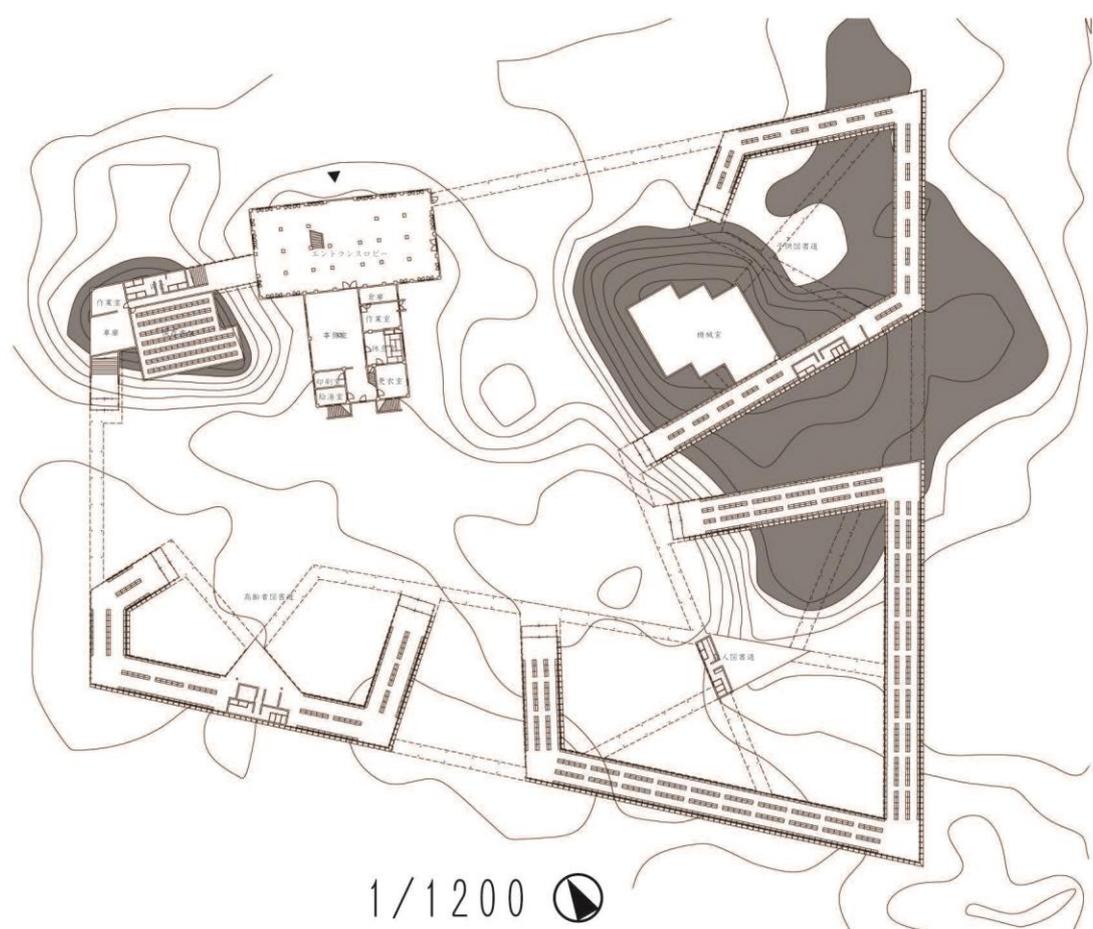


南側から中心広場を見る

屋根伏図



一階平面図



現代時間への抵抗

—仮設が生み出す商産業形態—

Keywords

現代時間 商産業 カオス
手作業 仮設性 カオサン通り



AK12066 竹内 俊一

1. 始

あるホームレスの日雇い労働者にヒアリングした時、彼は次のように語った。

「俺達は急成長する社会のスピードについていくことが出来なかった…」

それを聞いたとき、社会のスピードにしがみつこうように生きる我々は彼らの立場と紙一重なのではないかという疑問が生まれた。

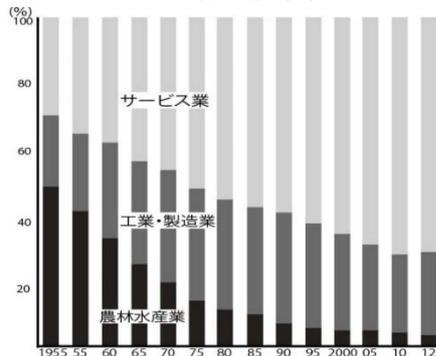
腕時計、携帯電話を見て逐一時間を確認し行動する。電車を降りると我先にとエスカレーターに並ぶ。改札を出て脇目も振らず一直線に目的地に向かう。一度立ち止まり冷静になって周りを見渡す。皆なにを急いでいるのだろう、私はなにに焦っていたのだろう。

2. 研究背景

2.1 産業構造の変化

かつて、社会生活における行動の調整のために人間は時計という道具を作り出した。現在人々が依存する時計の時間は、産業が発達し時代が変わるにつれて生活の時間軸を変化させ、社会全体の時間のスピードを上げていった。歴史的にみると、産業構造の変化は、経済成長の転換期と密接に関連している。そして変化のスピードはその時代の社会のスピード感と比例すると考える。

表1 産業構造の変化



資料出所 総務省統計局「国勢調査」「労働力調査」

2.2 第四次産業革命

次に起こる経済成長の転換期と予想されるのが第四次産業革命である。第四次産業とは様々な機械(製造ライン、車、ロボット、調理マシン等)とインターネットを接続させ、情報を瞬時に収集し分析し、設備の生産効率を高め

るものである。これが行われることで単純作業のほとんどが全自動で行なわれる日が来るだろう。第四次産業革命により生活が便利になり時間の有効活用が可能になる一方で、社会のスピードから遅れた派遣社員やアルバイト・パート等の非正規雇用の人々の失業が増えることが懸念される。

3. 研究目的

戦後と比べ現在の日本を取り巻く環境は、大きく変化した。この変化に対する課題は、変化のスピードといかうまく対応していくかである。しかし今後も時計の時間で生活を続ける以上、人々は時間に追われた忙しくストレスの絶えない生活を続けることになる。本計画では忙しさの根源である社会のスピードを緩和させる方法を空間的に探ることを目的とする。

4. 敷地概要

4.1 江東区豊洲

前述の通り産業構造の変化は経済成長の転換期と密接に関連している。豊洲はその産業構造の変化が顕著に表れた街である。豊洲は戦後復興の際に電力・ガスの生産、石炭・鉄鋼などの埠頭の拠点として栄えた。しかし現在は再開発によってたくさんのオフィスビル、タワーマンション、商業施設も建設され以前の豊洲の面影はない。

急激な成長は人口からも見て取れる。再開発地域の住人のほとんどは平成になって移り住んできた人で、現在も居住者・就労者共に増え続けており、現在の豊洲駅における一日の平均乗降者数は2000年に比べ約4倍の20万人近くにもなっている。

一方、これから豊洲に起こる転換期として挙げられるのが東京オリンピックの開催と築地市場の豊洲移転であり、日本人のみならず海外からの観光客増加も見込まれる。

4.2 対象敷地

敷地は豊洲四丁目の都営団地の街区とする。豊洲四丁目は変わりゆく豊洲の中で唯一再開発地域に含まれていない場所であり、いわば豊洲で唯一空間に内在する時間が大きく変わっていない場所だといえる。設定した敷地には昭和42年に建てられた都営豊洲四丁目団地が存在しているが、老朽化により建替計画が進められている。計

画案では団地がよりコンパクトに集約され、空き地が生まれることが決まっているのだが、利用方法までは決まっていない。しかしこのままいくと、この空き地も豊洲2,3丁目と同じような再開発がなされ、現在ある周辺の風景も様変わりし、空間に内在する時間が変わってしまう可能性がある。

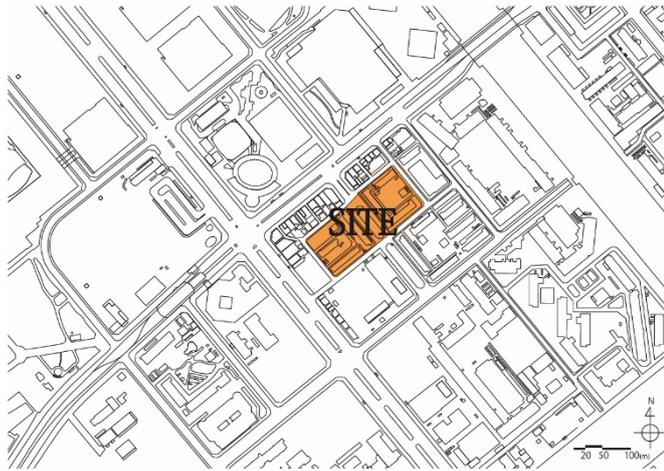


図1 計画敷地

5. 設計概要

5.1 設計主旨

東京オリンピックや新豊洲市場等の新しい可能性を踏まえ豊洲に既存のオフィス街とは異なる、時間に縛られない商産業形態を計画する。

時間に縛られずにその人たちが自分の時間で生産するものとして創造的なものを求める。本計画はそのための商空間、住居を計画する。仮設性を持つプログラムにより街路は毎日異なる顔を見せ、様々な人が行き交うカオスの空間を生み出し、働く人、住む人、訪れる人に対して現代とは異なる新しい時間感覚を見出させる。



図2 ダイアグラム

5.2 プログラム

- ・多種商業空間
- ・コワーキングスペース
- ・ゲストハウス
- ・居住空間 可動式コンテナ住居
- ・子供体験学習空間

大量消費の象徴とも言うべき豊洲において、その対極にある手作業によって作りだされたモノを生み出す空間を計画する。身分・学歴・職歴に関係なくものづくりをしたいという志を持った人々が集まり、各々が作ったものを展示・販売する。

6 設計手法

6.1 コンバージョン

都営団地のうち耐震補強し利用する部分と、新しい空間を併せることで団地のコンバージョンを行い、新旧が混ざり合う重層的な空間を生み出す。第二次産業革命時に均質的にかつ大量に建設された団地に対して、型にはまった工業的な仮設建築が柔軟な形を形成していくというアンチテーゼを掲げた。

6.2. カオサン通り

計画のモデルとしてタイ王国の首都バンコクに位置するカオサン通りに着目する。カオサン通りは世界的に有名な安宿街としてバックパッカーの聖地と位置づけられている。この地に訪れる人の目的は様々で、その様々な構成要素が積み重なることで形成され、多彩な要素を受け入れる柔軟性を持った生き生きとした空間が生まれている。喧噪と猥雑さが入り混じる摩訶不思議な空気で溢れかえっており、時間を気にすることなく生活することができる。屋台や手売りの多い仮設性をもつこの空間は日々変化し続ける。



写真1 カオサン通り

7. 終

東京オリンピックを間近に控え、新たな産業革命が起き、働き方に変化が起きようとしている今、自分が感じる時間に対して改めて考えなおす時がきた。

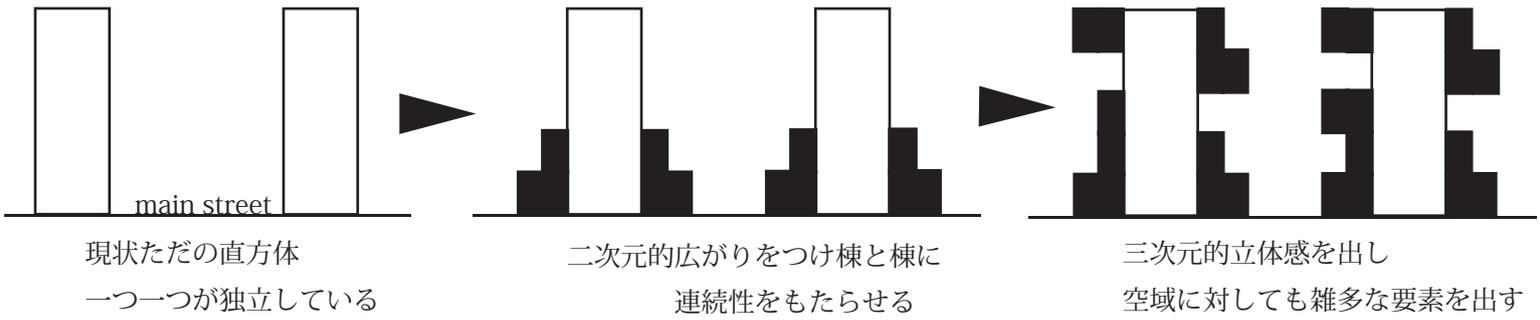
本計画ではこれから新たに産業革命が起きることを見通したうえで産業のオルタナティブな未来像を提案している。バラバラな時間感覚で生活する者たちを仮設商業によってつなぎ合わせることで時間感覚の重要性を気付かせる。

日々形を変える仮設空間は時間時代に左右されない社会を作り出す。

参考文献

- 1) 時間と時—今日を豊かにするために—
山口大学時間学研究所 学会出版センター
- 2) 時間のデザイン
早稲田大学渡辺仁史研究室 時間—空間研究会 鹿島出版会
- 3) 大人の時間はなぜ短いのか 一川 誠 光文社新書
- 4) 第三の波 アルビン・トフラー 中公文庫
- 6) バックパッカー・プレイスの空間構成とその変容
—バンコクカオサンエリアのケーススタディー—森聖太、平山洋介
- 8) 現代集合住宅のリ・デザイン 日本建築学会

Diagram



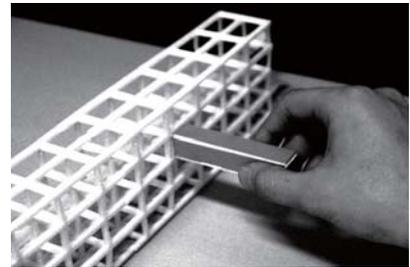
Industrial system



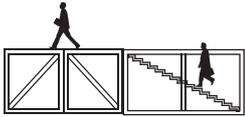
traveler = resident = creator



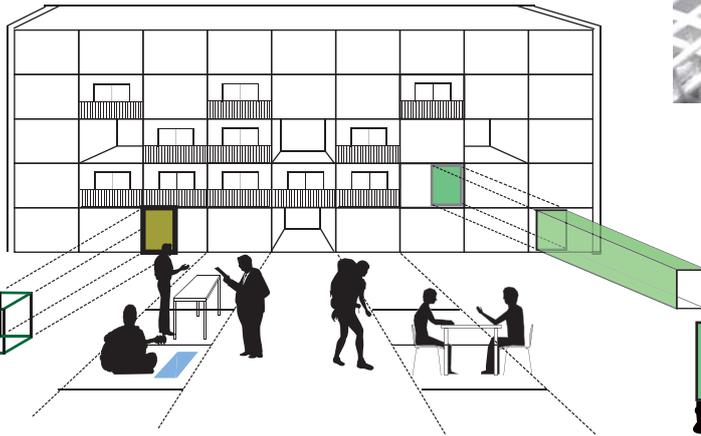
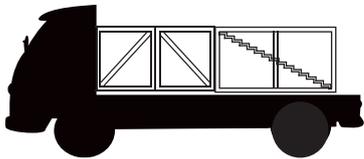
商業者はコワークによりアイデア、インスピレーションを受ける
時間に縛られず自ら創作、制作したものを世に出す



仮設街路

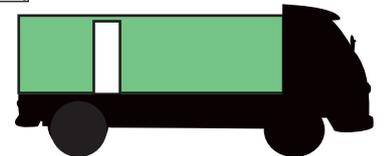


仮設による組み合わせが
ただ通るだけの街路に様々な顔を見せる
街路空間に様々な商業を配置



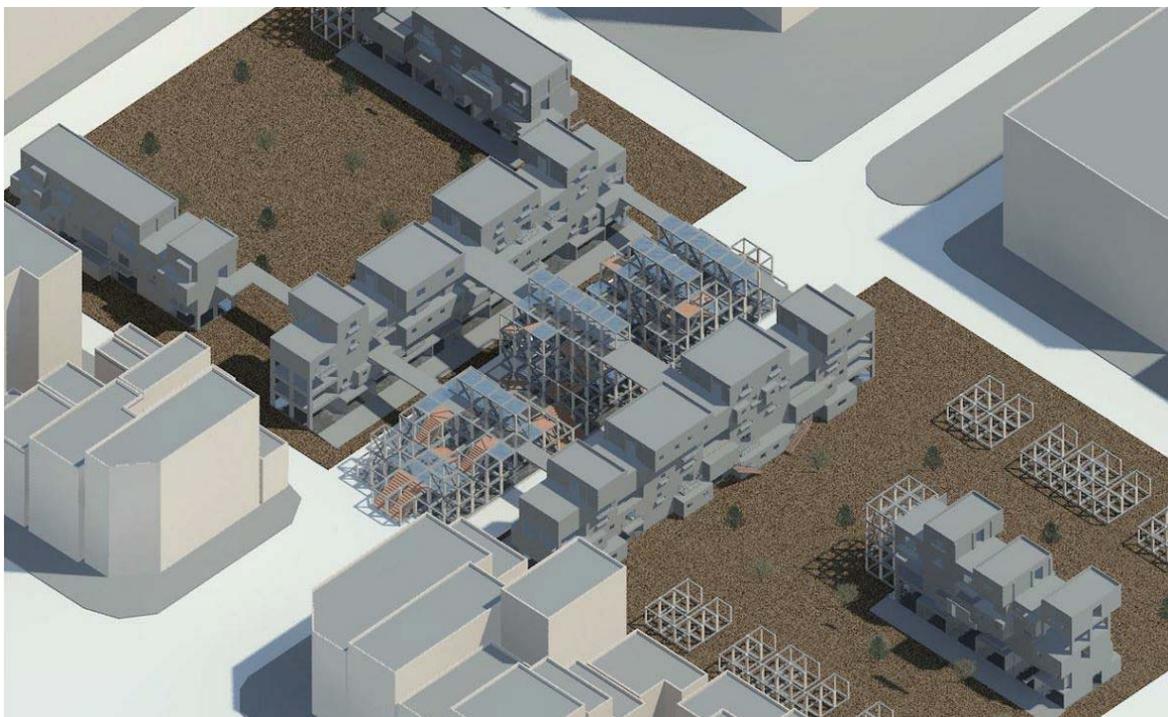
コンテナ式住居

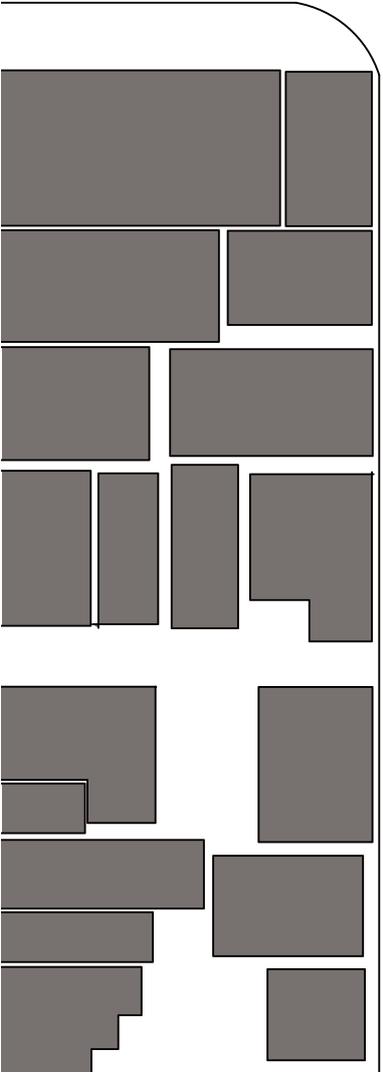
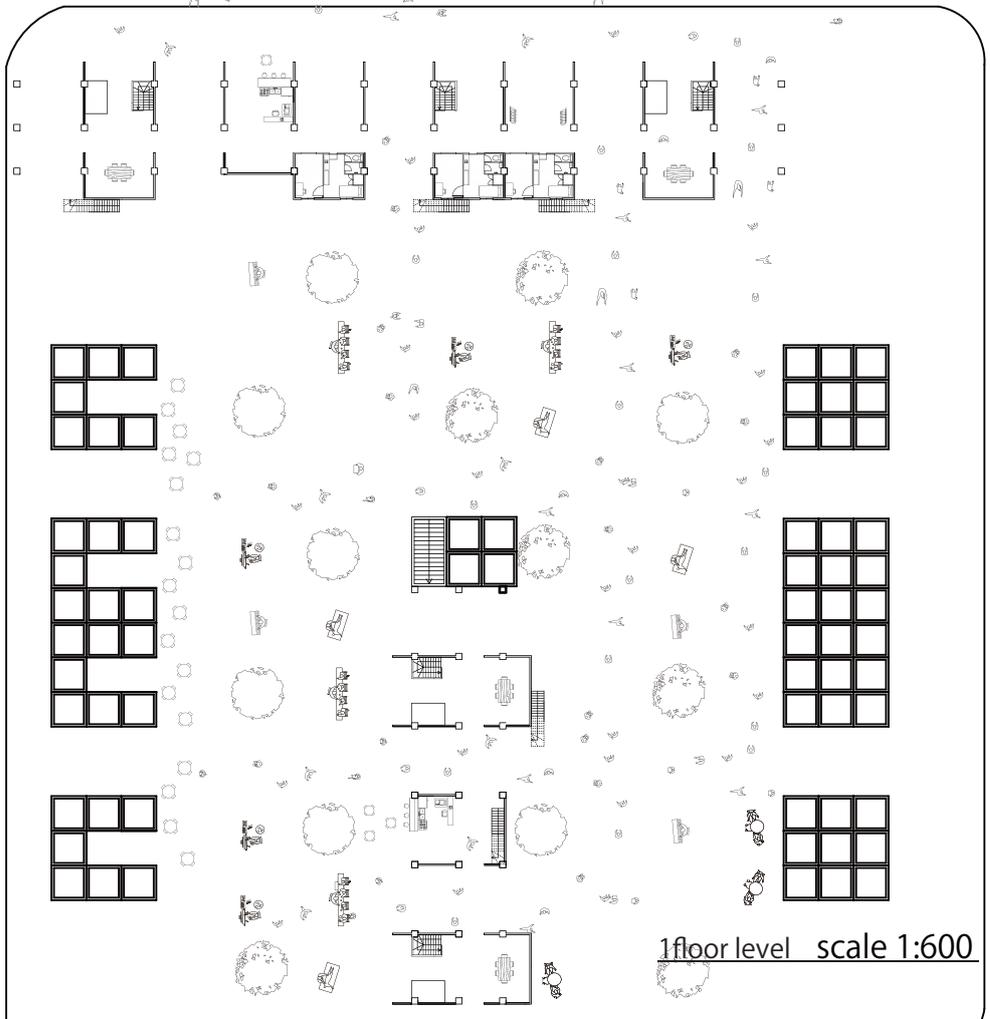
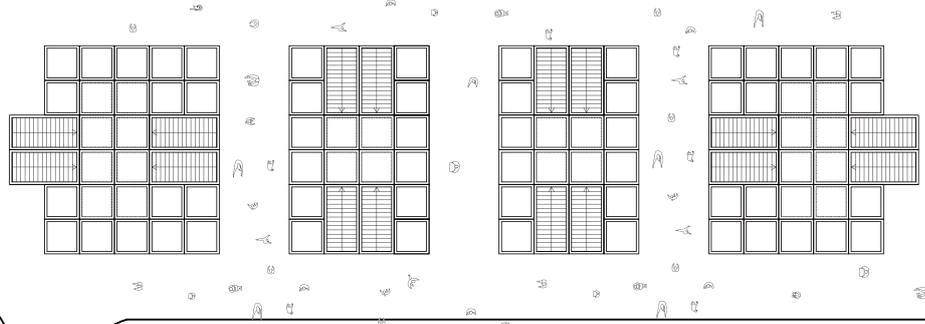
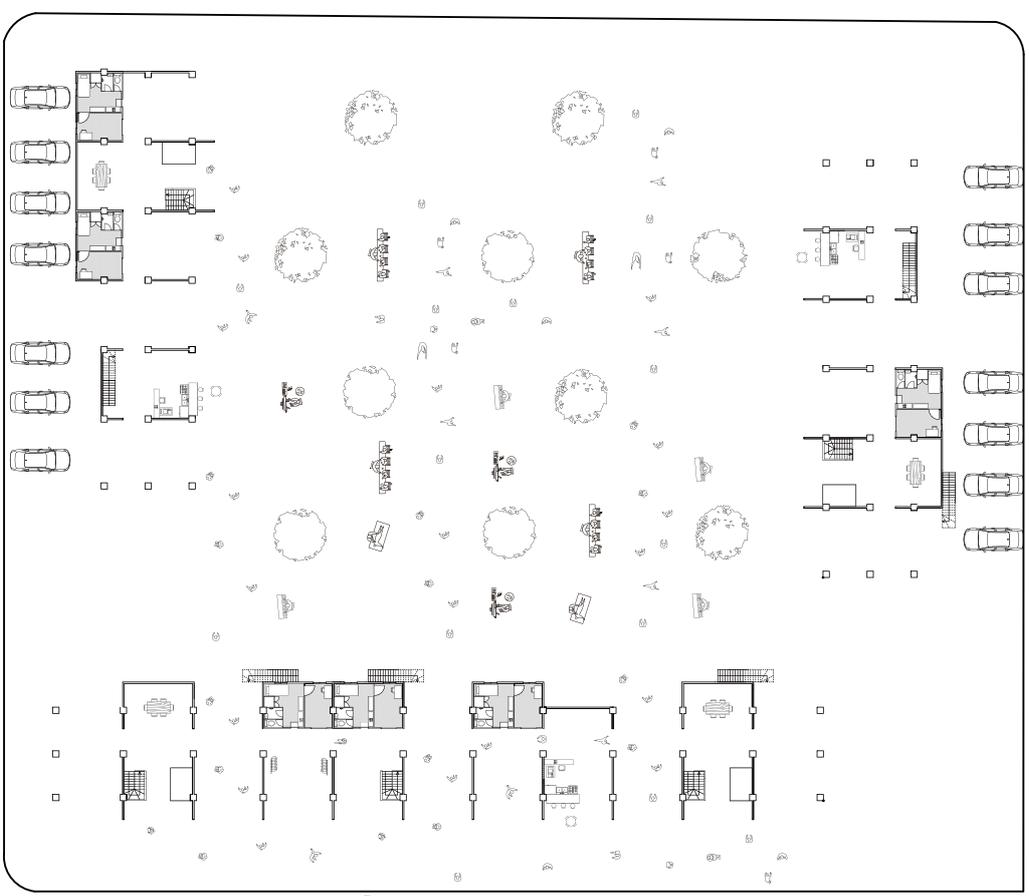
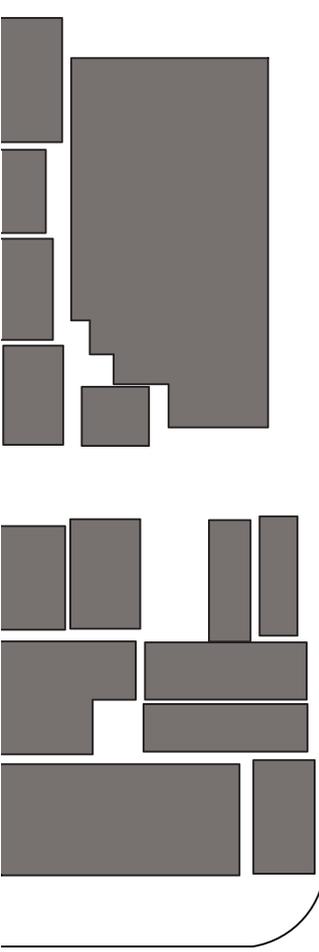
住居自体が移動可能
仮想的居住形態により住み方を変える



場所・時間を決めない仮設商業が様々な社会背景の人々を繋ぐ
多要素存在するカオス的空間が時間感覚の重要性を気付かせる

Perspective





1 floor level scale 1:600